

## 小田原市文化振興ビジョン策定検討委員会 第4回会議概要

1 日 時：平成23年11月25日（金） 18：30～20：50

2 場 所：小田原市役所 大会議室（7階）

3 出席者

(1) 委員（9名）

石塚委員長、間瀬副委員長、鬼木委員、桧森委員、杉崎委員、露木委員、  
岩城委員、大森委員、山口委員  
（欠席：平井委員、神馬委員）

(2) 行政（7名）

諸星文化部長、奥津文化部副部長、座間文化政策課長、古矢文化芸術担当課長、  
杉本文化政策係長、福井主査、瀬戸主任

4 傍聴者：2名

5 概 要（議事）

(1) ビジョンの素案について

【石塚委員長】

- ・過去3回の検討を基に、事務局でビジョンの素案をまとめていただいた。前回の骨子案に比べ、成案に近い形となっている。本日の検討で案を固め、最終回となる第5回会議では細部の詰めを行っていきたい。
- ・本日の進め方としては、一章ごとに皆さんから意見を伺うこととしたい。

（ビジョンの素案について古矢文化芸術担当課長より概要説明）

【石塚委員長】

- ・まずは、第1章「文化振興ビジョン策定にあたって」について。全体構成についても、意見があれば伺いたい。

【桧森委員】

- ・全体としては、まとまってきている。
- ・「文化振興ビジョン策定にあたって」というタイトルを、より端的に内容を表すものとして、「なぜビジョンが必要か」「なぜビジョンを策定するのか」といったものにできないか。
- ・「文化活動は同時に経済活動でもある」という考え方と、「文化活動が経済活動に波及していく」という考え方の2つが示されているが、経済面での重要性としては、

波及効果のほうが大きい。文化活動は、それ自体は非営利であることが多いが、経済活動における付加価値をもたらすものである。

- ・文化振興により創造性のある人材を育て、その人材が付加価値を増大させていくという循環により経済が活性化していく。順序で言うと、「まちづくり」の次が「経済活動」となる。そして、「まちづくり」の項目でも付加価値との結びつきについて明記したい。付加価値についての記載が「都市ブランド」と重複するので、この2項目は一つにまとめてしまっても良いと思う。「経済活動」の部分にある「文化による差別化を通じて地域経済の差別化を図る」だけでは、表現が弱い。

#### 【大森委員】

- ・「はじめに」の中で、北条氏三代氏康の時代に「西の山口、東の小田原」と並び称されるほど小田原の文化やまちづくりの発展があったことを記載できないか。
- ・8ページに「暮らしの中に幸せが見つかる小田原」というキャッチフレーズがあるが、この部分は文化活動をする人達の合言葉となるようなものが良い。文化について語られる場面はあっても、その内容が人から人へと伝わっていかないと感じている。ハードルの低い表現として「伝えたくなる感動に出会える小田原」や「伝えたくなる感動が見つかる小田原」とし、それぞれの文化活動の場で、参加者に対して「人に伝えたくなる感動」を何か一つ提供するようにしてはどうか。
- ・ホールに来た観客のうち、その日が誕生日の人に花束を贈るという事例を以前に桧森委員から伺ったことがある。祝ってもらえた本人は嬉しくて誰かに伝えたくなるだろうし、その場にいた他の人からも、そのことがホールの外へと伝わっていくと思う。また、まちあるきに参加すると「小田原に長く住んでいるが、近所にこのような場所があるとは知らなかった」と言っている人が多く、これも「人に伝えたくなる感動」と言える。
- ・それぞれの文化活動の中で、「他ではこんなことをしているが、自分達はどうするか」と考え、競い合って小田原の文化活動を盛り上げていけると良い。観客側も「次は何をしてくれるのだろうか」と期待するようになる。いずれにしても、独り善がりではなく、他者を意識することが大事。

#### 【桧森委員】

- ・今の大森委員の発言を聞いて思いついたのだが、聖書の中に「真理はあなたを自由にする」という言葉がある。これを言い換えて、「文化はあなたを何々する」「文化はあなたに何々をもたらす」という表現にはできないだろうか。文化がもたらすものをイメージさせる、分かりやすい表現だと思う。

#### 【山口委員】

- ・桧森委員が指摘されたように、タイトルに違和感がある。第1章はいろいろな要素が含まれた複雑な構成だが、最終的には二本の柱を設定する章と思われるので、そ

のことをはっきりさせるようなタイトルが良いのではないかと。

- ・大森委員がおっしゃった「西の山口、東の小田原」は、一般に定着しているので良いと思う。しかし、この言葉が記されている「北条五代記」は、北条氏の旧臣が北条五代の歴史をPRするために書いたものなので、市長の言葉である「はじめに」への記載には向かないのではないかと。

**【杉崎委員】**

- ・「はじめに」の中で東日本大震災に触れており、そこから日本の美や和といったものが想起されるが、1ページにある「異文化」という言葉からは、和の文化が異文化になってしまっているように感じる。日本人の美徳が、今の社会には必要。

**【古矢文化芸術担当課長】**

- ・「はじめに」は、最終的には市長と相談のうえ作成する部分だが、「日本人の秩序正しきや相互扶助の精神」という言葉により、和や美徳を表現している。
- ・杉崎委員のご指摘は、日本人の和の精神が、今の時代は異文化になってしまっているということか。

**【杉崎委員】**

- ・そのように捉える人が増えてきている。以前は海外の文化に目が向けられており、10年程前から日本の文化が見直されるようになってきたが、その点で日本の文化は異文化になってしまった。グローバルな観点からは、和の文化は異文化となる。
- ・「異文化」という言葉自体が悪いというわけではないのだが、どう捉えられるかが見えてこない、使用には抵抗がある。

**【石塚委員長】**

- ・鬼木委員はどのように考えるか。

**【鬼木委員】**

- ・「1. 文化とは何か」は、文化について語るというよりは、文化には様々なものがあるのだと説明する部分である。何が文化の主流となっているかということは、ここでは問題にされていない。
- ・ビジョンの構成として、最初に文化一般について述べ、そのうえでどういった文化を目指すのかということになる。その段階であれば、和の文化が小田原の特徴だというようなことが書かれても良いと思う。

**【桧森委員】**

- ・ここでの「異文化」は、文化的多様性を指している。いろいろな文化があるということ。

**【石塚委員長】**

- ・「異文化」の表現については、以上でよろしいか。

(委員了承)

【石塚委員長】

- ・露木委員はいかがか。

【露木委員】

- ・文化とは人づくりだと思うが、それには経済も絡んでくる。文化の根本的な柱としては感動や生活を重視すべきだが、実現のためには経済活動も無視できない。この2つは切り離せない両柱である。

【鬼木委員】

- ・「(3) 忘れてはならないこと」に書いてあることは、忘れてはならないことというよりは、7 ページの「3. 文化振興ビジョンが目指す小田原のすがた」の根本思想のようなもの。将来像への考え方の基礎であり、前提となるものである。
- ・先程議論になった8 ページのキャッチフレーズだが、「伝えたくなる感動が見つかる小田原」はおもしろいと思った。ビジョン全体を象徴するキャッチフレーズにするのであれば、今書いてあるものは副題とし、誰もがこのビジョンと同時に思い浮かべることができるような短い言葉としたい。桧森委員のおっしゃった、「文化はあなたを何々する」も良いと思う。「文化はあなたを熱くする」では軽すぎるか。今書いてあるものも含蓄のある言葉だと思うので、副題として活かしていただき、その上に文化振興ビジョンを象徴するような言葉があると良い。
- ・「創造都市としてのブランド力の向上」という項目があるが、「創造都市」という言葉は、横浜市を含めいろいろな場所で使われているので、小田原ならではの言い回しに変えても良いのではないか。本文中に「地域経済におけるものづくりやサービス産業」とあるが、文化によって地域経済が活性化し、ブランド力が高まることを、創造都市という単語ではなく、別の言い方で小田原ならではのまちへの働きかけとして表現できればと思う。

【桧森委員】

- ・「創造都市」という言葉を使わずにどう表現するかが課題。「創造都市」というと、ユネスコ創造都市ネットワークを思い浮かべてしまい、「小田原市はネットワークへの加盟を目指しているのか」と勘違いされてしまう可能性もある。意味としては間違いではないが、手垢がついてしまった言葉でもあるので、独自の表現が必要。

【杉崎委員】

- ・「幸福」という言葉をどこかに入れられないか。文化を HPI（地球幸福度指数）の向上につなげていきたい。

【岩城委員】

- ・章の組み方はとても良いと思う。「ア 経済活動」の部分に「差別化」という言葉が多用されているが、その意味と、使って良い表現なのかどうか分からない。
- ・第3章になるが、「想定する事業例」が分かりやすく良い。「アーティスト イン

レジデンス」とは何か、教えていただきたい。

- ・ 8 ページのキャッチフレーズは、私も気になっていた。「交わす言葉があったかいね、小田原」が良いと思う。どのような会議の場でも、日常のあいさつでも、交わす言葉が刺々しいと幸せを感じない。街中にも議場にも、いつでも温かい言葉が溢れていてほしい。

**【石塚委員長】**

- ・ 第 3 章については、後程検討する。間瀬副委員長の意見を伺いたい。

**【間瀬副委員長】**

- ・ 全体の構成はうまく収まったと思うが、「はじめに」が長い。市長のあいさつなので、広範囲をカバーしなければならないというのは分かるが、もう少し削れないか。
- ・ 全体としては、「(2) まちへのはたらきかけ」が気になった。4 ページは、桧森委員がおっしゃったように、「経済活動」と「まちづくり」を入れ替え、「まちづくり」の一部と「都市ブランド」をつなげる。「(2) まちへのはたらきかけ」全体が、経済活動の説明をしているように見えてしまう。文化と経済を切り離すべきとは思わないが、やはり順序としては、まちづくりから始めたほうが良い。
- ・ 「差別化」という言葉が気になるという意見に関しては、業界ではよく使う言葉なのだが、文章の中でこれだけ出てくると確かにうるさいので、言葉は選びたい。第 1 章には、マイナーな言葉は使わず前向きな表現としていきたい。一回くらいは「差別化」を使わざるを得ないが、読み替えの作業が必要。
- ・ 「創造都市」は、文化庁でも施策の一つとして掲げている。意味が固定化してきているので、別の表現に変えられると良い。

**【桧森委員】**

- ・ 「差別化」は、供給側が一方的に他との違いを示すために使う言葉。「付加価値」のほうが良いが、どうしても似た言葉を使うのであれば「独自の」や「独自性」となる。付加価値は、受け取る側が認めることで初めて成立するもので、相手があることを考えた言葉である。

**【石塚委員長】**

- ・ 文章は、一般市民が読んで理解できるように、意識して整理していただきたい。易しい言葉にできるものは置き換えが必要。一般的に、カタカナの用語は専門家の視点によるものであり、市民には分かりづらい。どうしても使用するのであれば、注釈をつけるなどの工夫を。
- ・ 章立てを整理すると、第 1 章は文化論とビジョンの必要性の説明。第 2 章は、第 1 章を前提とした小田原の現状分析と評価。第 3 章は、第 2 章を踏まえた対策となる。
- ・ 4 ページの「とりわけ地域において、経済の循環を生み出すためには、文化活動を重視し、文化活動による経済需要を喚起するとともに、文化による差別化を通じて

地域経済の差別化を図ることが重要であると考えられます。」や「国内外で、文化を一つのキーワードにしたまちづくりで成功している例が見られます。ある一定のエリアを文化的に特徴あるゾーンと位置づけ、施設や民間企業を集積する、街並みや景観を整備する、などの手法によって、文化の香るまちとすることも行われています。」は、一般市民にはイメージが沸きにくいので、具体的な例を挙げて説明する必要があります。

- ・第1章はコンパクトにまとめて分かりやすく。全体のバランスが悪い。

**【桧森委員】**

- ・石塚委員長に同意。学者の論文のようになってしまっているが、ビジョンは絵である。絵画的に、分かりやすくしたほうが良い。
- ・「アイデンティティ」、「キーワード」、「エリア」、「ゾーン」などは使うべきではない。分かっているようでいて分かっていない言葉を使いがちだが、日本語に言い換えたら何になるかと考えながら言葉を選んでいくと、分かりやすくなる。

**【石塚委員長】**

- ・1時間経過したので第1章は以上とし、第2章「小田原の文化を取りまく環境」に入る。ご意見をいただきたい。

**【桧森委員】**

- ・ここに挙げた課題は、ビジョンの実現により自ずと解消していくものだと思うが、そのことをどこかに明記しておかないと、課題の解決はどうなったのかという疑問が出てきてしまう。
- ・12ページの「小田原の多様性」は、古くからの宿場町や交通の要所であることから、様々なものがもたらされ、交流してできたものなのか。

**【山口委員】**

- ・そのような面もあると思う。

**【桧森委員】**

- ・小田原に関しては、多様性が生まれる必然性といったものを前面に出したほうが良いと思う。

**【石塚委員長】**

- ・この部分は第3章となるので、後程としたい。

**【山口委員】**

- ・第2章は、文ではなく箇条書きとすることになっているのか。

**【石塚委員長】**

- ・特に決めていない。

**【古矢文化芸術担当課長】**

- ・箇条書きのほうが分かりやすいと思ったのだが、文にすることも可能。

【桧森委員】

- ・第2章があまりに短くて、第3章の話をしてしまった。バランス的にどうなのか。

【石塚委員長】

- ・第1章でビジョンの必要性について述べており、第2章は、小田原の現状の整理と課題という位置付けになっている。

【山口委員】

- ・第1章を受け、第3章を展開していくうえでの前提となるもの。

【大森委員】

- ・難しいとは思いますが、やはりデータが欲しい。文化活動に参加していると、高齢者が多いと感じる。素晴らしいことなのだが、これからは若い世代や子ども達にも広げていく必要があることを分かってもらうためにも、参加者の年齢層を示すグラフのようなものがあると良い。
- ・私が考える課題とは、病院のカルテのようなもの。どこが悪いのかを書くべき。「なんとなく痛そう」では、曖昧な治療法しか出てこない。文化活動をしている人に「そうだよ、そこが問題なんだよ」と共感してもらえないと、他人事になってしまう。私達委員だけでなく、一般の市民の皆さんも理解し、共有したうえでアクションを起こしていかないと何も変わらない。カルテには軽い怪我も命にかかわるものも全部書き、命にかかわるものから治療していく。皆さんに危機感を持ってもらい、取組の優先順位を示したい。危機感がなければ、なぜビジョンを策定するのか、なぜ文化振興をするのかという、そもそも論に戻ってしまう。文化活動をしている人は、それぞれに小田原の問題点を感じており、それに対して、「そうだ、よく言ってくれた、だからやらなくてはいけないんだ」と、魂を揺さぶることで次のアクションが起こっていく。

【石塚委員長】

- ・前回の資料の市長からの意見でも、「並列的に記載されているので、優先順位をつけていく。」「ビジョンの目的をある程度明確にしていくべきである。」「課題については、具体的に迫ってきているものでないといけない。」というものがあつた。大森委員の意見は、市長も感じていることである。
- ・事務局としては関連部署との関係もあると思うが、問題点をクリアにすると不都合ということはあるのか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・課題に優先順位をつけるのは難しい。文化振興を妨げる要因を分析することは可能だが、まちづくりの課題となると、経済や教育も絡んでくることになり、それぞれの部署がすでに取り組んでいるものもある。
- ・データに関しては、意識して個別に提示することはできる。小田原市美術展覧会の

出展者数は確かに高齢者に偏っているが、一方で、ミュージックストリートのダンスイベントなど若者が中心に参加している事業もある。高齢化に悩んでいる団体もあれば、高校生が多数入ってきている団体もあり、必ずしも一部の問題が全体にも当てはまるとは言えない。

- ・委員の皆さんが「小田原市が緊急に取り組むべき課題はこれだ」と認識されているものがあれば、ご提示いただきたい。

#### 【桧森委員】

- ・課題には2つの種類がある。一つは大森委員が指摘されたように悪い面を直すことだが、一方で、良い面をさらに伸ばしていかなくてはならないという課題もある。
- ・カルテと考えることもできるが、ここでの治療方法は、免疫療法や漢方薬のようにじわじわと効いてくるもの。全体の免疫力を高めることで、様々な問題に対処できるようになる。文化に関してはトータルで考える必要があり、個別に対処しても、ビジョンが目指す小田原の豊かな文化形成には至らない。
- ・大森委員が示されたように、文化活動の中で課題を感じている人に共感していただく一方で、文化活動をしていない人にも小田原の良さや課題を知っていただく必要がある。文化活動をしていない人の共感を得ることも大切である。

#### 【石塚委員長】

- ・例えば、素案の中に「少子高齢化の著しい進展により、文化や地場産業など様々な分野における担い手や後継者が減少してきており、その確保が必要です。」とあるが、担い手や後継者が減っていることのバックグラウンドには、地場産業そのものの衰退もある。地場産業が衰退している状況では、担い手や後継者を確保しても解決にはつながらない。事実をきちんと認識することが、的確な対策につながっていく。

#### 【桧森委員】

- ・付加価値を生み出す産業には、自ずと雇用が生まれる。例えばデザインの力で地場産業がより付加価値の高い魅力的なものとなって初めて、担い手や後継者が集まってくる。文化はそういう面でも効果を発揮する。なぜ免疫療法かというのと、対処療法のように個別に何かをしたから再生するというものではないからである。

#### 【石塚委員長】

- ・課題については、再度整理していただくということで良いか。

#### 【間瀬副委員長】

- ・具体的な課題を挙げてしまうと、特定の団体等から反発があり、かなり厳しいとは思っている。文化活動をしている人は、行政の仕組みに問題があると感じているのではないだろうか。逗子市の文化振興基本計画には「行政の文化振興体制の明確化と連携体制の整備」を明記し、文化を軸とした行政内部の連携を強化することを入れてあ

る。また、特定のジャンルを挙げて団体が活性化していないと書けば、ビジョンの良し悪しにかかわらず、そのジャンルに属する人は「攻撃された」と受け取ってしまうが、課題となっていることを挙げていかななくてはならない。

- ・ビジョンをまちづくりの基本計画と考えれば、地域経済、歴史文化、都市基盤、市民自治の全てに関わる、幅広いものとなる。市役所内部の横の連携がないとできない事業なので、準備をしておかないと後々きつくなる。内部からも抵抗があるとは思うが。

#### 【桧森委員】

- ・もう一つ、抵抗があっても書かなくてはならないのは、文化に対する投資が十分でなかったということ。
- ・小田原市の課題としてこの2つを入れておくと、多くの方に納得してもらえるのではないか。

#### 【間瀬副委員長】

- ・行政とは縦割りだから、ここで横串を入れておくと良い。逗子市でも実施しているが、実際には大変である。

#### 【石塚委員長】

- ・10ページの7項目のうち、1、3、4、6番目は現状の問題点であり、その他は解決の方向になってしまっている。2つに分けて、整理し直してほしい。
- ・第2章に関して他に意見がなければ、第3章「文化振興の基本目標と取り組み」に移りたい。

#### 【桧森委員】

- ・先程、第2章の部分で話したことに追加。「2. (1) イ 文化活動の環境を整える」の「想定する事業例」の3つに、既存文化施設の再整備又は再構築を入れておくと良い。
- ・岩城委員から質問のあったアーティスト イン レジデンスとは、アーティストが滞在して作品を作ること。文化施設に一定期間滞在するのが一般的だが、アーティストが住むための施設を建ててしまう場合もある。ヨーロッパでは、長期間居住する例が多い。小田原でも実施するのか。

#### 【古矢文化芸術担当課長】

- ・今年度実施した。露木委員にもご協力いただいている。

#### 【露木委員】

- ・無尽蔵プロジェクト「ものづくり・デザイン・アート」の須藤一郎さんが、若手アーティストを育てようと企画したもの。国内外のアーティストの交流も兼ねて作品を制作、発表するというイベント。

#### 【古矢文化芸術担当課長】

- ・小田原の場合は、滞在施設がないためビジネスホテルに宿泊していただき、作品制作は市内の公共施設で行った。
- ・アーティスト イン レジデンスは、今年度に新しい試みとして実施したものなので、事例として挙げさせていただいた。

**【露木委員】**

- ・現在、清閑亭で作品を展示している。

**【岩城委員】**

- ・名称だけでは分からなかったが、そのイベントは知っている。

**【桧森委員】**

- ・その土地に特徴的なものがあるとおもしろい。北九州市は鉄の街であるため「鉄の芸術」とし、鉄で作品を作る世界各国のアーティストに、数か月間滞在していただいている。そのようなものが小田原にあると良いのだが。

**【古矢文化芸術担当課長】**

- ・小田原の場合は木材ではないだろうか。

**【桧森委員】**

- ・小田原には廃校予定の学校はないのか。

**【古矢文化芸術担当課長】**

- ・片浦中学校がある。昨年3月に閉校し、現在はアートの拠点の一つとなっている。

**【大森委員】**

- ・13 ページに「戦略的に展開」とあるが、誰が主体となるのか。

**【古矢文化芸術担当課長】**

- ・第4章の「推進体制」につなげていくことを想定しており、この推進体制の中で戦略を練ることになる。必要な体制や予算は行政が準備することになるが、行政が市民を巻き込み、市民の力で推進していきたいと考えている。

**【山口委員】**

- ・第1章で柱が設定され、第2章で小田原の課題が整理され、第3章でそれらを踏まえて3つの目標を打ち出し、それに沿って具体的な取組が示されているわけだが、課題・目標・取組の相関関係が把握しづらい。何らかの形で相関関係を示すことができれば、ビジョンの体系そのものがすっきりしてくる。
- ・「想定する事業例」には、すでに実施しているものとまだ実施していないものが混在しているようなので、実施の有無を分けたほうが良いのではないかと。「想定する」という表現では、全て実施していないものという印象を受ける。

**【石塚委員長】**

- ・他にはどうか。

**【鬼木委員】**

- ・基本目標は、より芸術の面に踏み込んだ記載とし、小田原ならではの文化芸術として、どのようなものを目指したいかを示しても良いのではないかと。
- ・基本目標の表題が全て「何々のまち」となっているが、この目標を分かりやすくし、共有してもらうために、主語を「私達は」とし、(1)は「私達は、なりわいの中で文化を感じます」、(2)は「私達は、伝統から革新を生み出します」、(3)は「私達は、多様性を大切にします」という表現にしてはどうか。「まち」に加えて、「私達はこういことをします」という表現があると、目標として共有しやすくなる。

【桧森委員】

- ・鬼木委員の意見とほぼ同じである。
- ・18 ページでプロフェッショナルの人材が重要だと言っているのは、とても良いことだと思う。せつかくなので、もっとフィーチャー (feature・特化) してみても。発信力や創造性の面で、プロの力は大きい。小田原でプロの創造活動が増えているという状態は、3つの目標の全てに関連する、隠れた目標と言うこともできる。

【石塚委員長】

- ・露木委員はいかがか。

【露木委員】

- ・読み手の立場になると、分かりづらいかも。若い人などが読んだときに、すんなり頭に入っていかどうか。内容は良いと思うが、分かりやすい表現で。
- ・施策の実現にあたっては、体制づくりが大事だと思う。

【杉崎委員】

- ・振興とは、いろいろな人に文化に携わってほしいということ。文化をやって何になるのかというと、嬉しさ、楽しさを感じ、最終的には気持ちが幸福になっていくということだと思うので、「文化をやれば幸福になれる」というような、思い切ったキャッチフレーズを一つ出してしまってもどうか。
- ・日本は経済水準が高い一方で、意識的な幸福度は先進国の中でも最下位と言われている。そのような状況を知っていただいたうえで、小田原は文化によって幸福度の向上を目指すのだということを示してはどうか。

【桧森委員】

- ・文化の力で幸せになるということか。

【杉崎委員】

- ・そのような要素を入れたい。

【石塚委員長】

- ・大森委員はどうか。

【大森委員】

- ・読むのが誰かということを考えると、一般市民や文化活動に関心がある人だと思う

ので、そういう人達に実感を伴った言葉で伝えなくてはならない。読み物ではなく、アクションにつながるものにしてほしい。

【岩城委員】

- ・事業例を載せることで分かりやすいものとなっているが、一つ一つの文章は、さらに短くまとめることができると思う。

【間瀬副委員長】

- ・課題と取組は、関係させなければならないと思う。線で図示するのは難しいが、つながったものとして示していく必要はある。
- ・取組の具体例が出ると分かりやすいが、すでに実践できているものを並べても意味がない。すでにできているものであれば、「想定する事業例」ではなく「実践している事業例」である。
- ・手をつけたばかりのものを「想定する事業例」とすることは、推進していく方々にとっては足枷となるが、現在行っていることの一步先のレベルを示すことが良い。アーティスト インレジデンスも、今年が初めてとのことだが、事業例として明記することで、継続できる体制を整える目標となる。
- ・目標としての事業例は、各項目に一つずつは入れる。あまり多くする必要はなく、入れるとしても2、3個程度。逗子市文化振興基本計画でも同様に事業例を挙げたが、4、5個の項目もあれば一つだけの項目もあり、バランスが悪いとの指摘があった。最初は2個程度としておいても、ビジョンを推進していく段階で新たな課題が生じれば、それに対応する目標ができてくるものである。事業例は、現段階での近未来の目標として掲げていく。

【鬼木委員】

- ・19 ページに「中期的な目標を立て、優先的に取り組むものと、じっくり時間をかけて練り上げていくものを、それぞれに抜き出して考える必要があります。」とあるが、間瀬副委員長のおっしゃるような、手をつけたばかりの事業や実現が難しい事業を、敢えて優先課題として取り上げていくという考え方もあると思う。
- ・ビジョンは、共有してもらおう一方で、心に響くものでなくてはならない。刺激を受けるようなことが書いてあっても良い。思い切って優先順位を出してしまっても良いのではないか。
- ・外から小田原を見て、伝統の中に革新を見つけていくという部分が小田原らしいと思う。プロフェッショナルの育成のほか、アートフェスティバルとして小田原の顔となるようなものを市民の力で創り上げていくということにも重点を置くような書き方にできないか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・事業例の大部分は、間瀬副委員長のおっしゃった視点で挙げたものである。「市民

による文化芸術フェスティバル」については、市民文化祭の見直しを行っており、無尽蔵プロジェクトでも盛んに議論されている。「高齢者施設、障がい者施設等での文化活動」も、これまで高齢者福祉施策や障がい者福祉施策として各所管で対応していたものを、これからは文化施策として実施していかなくてはならないのではないかと考えている。「アーティスト イン レジデンス」は、民間からの提案により実現したものであり、小田原市として継続していくかは未定。「市民ホールの整備」や「図書館等の知の拠点施設の整備」も、大きな課題となっている。ここに挙げたものの多くは、今後どうなるかは分からないが、重点的に検討しているものである。事業の実施には予算を伴うため、文化政策課の意思としてどこまで書き込むことができるかという問題はある。

**【岩城委員】**

- ・ 鬼木委員が「私達は」という主語をつけようとおっしゃっていたが、19 ページの「責任と権限を持つ推進のための組織が求められます」にも、主語をつけて「組織を作り、実施します」としたほうが具体的なものとなる。実現可能性のある事業を挙げて優先順位を決めたとしても、誰がやるのかが見えてこない。

**【石塚委員長】**

- ・ ビジョンの実施にあたっては、市長が責任者となる。

**【岩城委員】**

- ・ 推進するのは誰か。

**【石塚委員長】**

- ・ 自主的な文化活動は市民が行うものだが、このビジョン自体を推進していくのは市長の責任。そのように解釈しないと、市のビジョンとする意味がない。当委員会では整理したものを最終的に案として市長に提出し、市長ができると判断すればそれが採用される。

**【岩城委員】**

- ・ 責任と権限を持った推進組織を作ろうと決心されるということか。

**【石塚委員長】**

- ・ そのような理解で良いと思う。

**【桧森委員】**

- ・ 鬼木委員のおっしゃっていた芸術文化に踏み込んだ記載は、どのように基本目標に盛り込んでいけば良いか。(4)として追加するのか、(1)から(3)のいずれかに含めるのか、鬼木委員の考えを伺いたい。

**【鬼木委員】**

- ・ 小田原の様々な地域資源や、多くの文化人が居住したという歴史性からも、アーティスト イン レジデンスは、小田原に適した事業だと感じている。芸術のジャン

ルを特定するというよりは、アーティストが小田原に滞在して創作活動をするのが、文化芸術面での特徴となっていくようなイメージ。自然環境などを気に入って小田原に住んでいる人と同じように、アーティストが小田原を気に入って、小田原に来てくれるという流れができると良い。

#### 【石塚委員長】

- ・第3章に関して皆さんの意見を伺ったが、いずれも重要な指摘なので、事務局はこれを活かせるように整理していただきたい。
- ・私からの提案だが、市民ホールで実施する事業の一つとして、日本の最先端で活躍する人を呼んでフォーラムを開催してはどうか。例えばiPS細胞研究所長の山中教授、地震学者で最先端の研究をしている方など。国際政治や日本の農業といった重要なテーマを扱う人や、海外に通じた人でも良い。小田原は東京に近いので、半日あれば来ていただけると思う。そのような事業によって私達自身が視野を広げたり、意識を深めたりすることも必要である。
- ・インターネットに関する話が出てきていないが、どのようなものを行政のシステムとして取り入れるかは、極めて重要である。とりあえずは広報戦略という部分で考えても良いのかもしれないが、どこかで触れておく必要はある。

#### 【桧森委員】

- ・石塚委員長からの指摘は大事なこと。16ページの「文化のネットワークづくり」は、オフライン、オンライン両方で考えていけると良い。バーチャルでのつながりを積極的に利用したネットワークづくりとも言える。
- ・市民の間でも、特定の地域やテーマについてツイッターやフェイスブックによる交流が生まれ、ネットワークができているが、ネット上でつながり、実際に会うという関係づくりも視野に入れていく。

#### 【石塚委員長】

- ・第4章「推進体制」について、意見を伺いたい。

#### 【桧森委員】

- ・「市民と行政の協働で行う組織を設置」とあるが、どのようなものか。意見交換、情報交換、政策決定、活動の評価などが考えられるが、どのような性格の組織を想定しているのか。

#### 【古矢文化芸術担当課長】

- ・アーツカウンシルのように、戦略的な観点から行政に対して予算化を要求し、予算配分もできるような最先端の組織があれば、有機的に推進できると感じている。効果測定や事業仕分けのような審査ができるようになれば、実施する側にも緊張感が出てくるだろう。
- ・いきなりアーツカウンシルのような組織ができるとは考えていない。権限には責任

が伴うものだが、例えば交通費程度しか出せない市民ボランティアの方に、それだけの責任を負わせることができるだろうか。

- ・まずは市民と行政が同じテーブルに着くことから始め、その中で、推進組織はこうあるべきと打ち出していくことを考えている。素案の中にある「小田原文化評定」は鬼木委員の提案された言葉だが、このような緩やかな組織を作り、そこから発展していくことが望ましい。最初から行政主導で組織を作ると形式化、硬直化してしまいがちなので、組織を作るところから協働で進めていきたい。

**【桧森委員】**

- ・組織のコンセプトとして、アーツカウンシル型とプラットフォーム型があるが、将来的にはアーツカウンシル型を目指すのか。

**【古矢文化芸術担当課長】**

- ・現時点では確定できない。

**【石塚委員長】**

- ・逗子市や横浜市では、どのような方法なのか。

**【鬼木委員】**

- ・横浜市ではビジョンの推進といったものはないが、行政の体制としては、文化と観光を一つのセクションとして、横の連携を図っている。
- ・地元の団体の方々が集まる組織として、創造都市横浜推進協議会がある。それぞれの立場でクリエイティブシティ・ヨコハマの推進に向けてどのようなことができるか意見を出し合い、提言としてまとめていく。

**【間瀬副委員長】**

- ・逗子市では推進組織が動き始めており、評価組織についても審議している。組織の考え方は、どちらかというところプラットフォーム型。名称は「文化振興条例基本計画推進会議」として来年度に正式に発足する予定。
- ・文化振興基本計画において行政内部の関係各課が連携することを打ち出しており、行政の事業は全て所管課が担うこととしている。推進会議では、行政と各団体が実施する事業をチェックし、遅れている部分を指摘することを想定している。文化団体の扱いについては、プラットフォームの中に入れてもらおうと考えている。評価組織については、どのように評価するか、悩んでいるところである。

**【石塚委員長】**

- ・小田原市ではどのようにしたら良いだろうか。

**【間瀬副委員長】**

- ・まずはプラットフォーム型としたほうが導入しやすい。市民の文化芸術活動は逗子よりも活発だと感じるのので、そのような方々と行政との意見交換の場を設定する。あまりに緩いとただの情報交換会になってしまうので、年6回程度の開催として将

来を見据えた議論を行い、将来的に評価組織ができていくと良い。

【大森委員】

- ・組織の人選について「文化団体が参加することが望ましい」と書いてあり、そのとおりだとは思いますが、これまでの経験から、文化団体から選ばれた人というのは、自分の意思ではなく誰かに言われて出てきたということが多かった。本当にやる気のある人に参加していただき、結果として、その人が文化団体に属していたということであれば構わないが、どこの団体から何人選ばなくてはいけないという決め方は良くない。なぜ自分の団体の人が選ばれていないのかと批判する人がいたとすれば、それは自分自身が積極的にやりたいと言えれば良いのである。人物重視で、やる気のある人に参加していただき、活気のある体制としたい。

【石塚委員長】

- ・市がオブリゲーション（obligation・責任）を負う仕組みは難しい。
- ・まずは評定衆を選び、予算を組む前の段階などで定期的に意見交換をするといったところからではないだろうか。そのような組織の設置にあたっては、市議会の承認が必要なのか。

【諸星文化部長】

- ・必ずしも必要ではないが、設置のために条例を定める場合や予算を要する場合は、市議会の議決が必要。また、議決の要否とは別に、所管の常任委員会に報告するといった手続が必要になる。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・全国的な動向を受け、市の方針としてはできるだけ条例により設置することとしている。この委員会も、委員の任期が1年未満のため条例化はしていないが、今後も継続するということになれば、設置条例を制定することになる。

【桧森委員】

- ・ビジョンだけでなく、その推進のために官民協働の組織ができ、進捗状況をチェックするとなれば、非常に画期的なものとなる。浜松市でも文化振興ビジョンを策定したが、それをフォローする体制はできていない。
- ・具体的な組織をイメージすることは難しいが、いきなりアーツカウンシル型の組織は無理だと思う。「小田原文化評定」という名称により、組織のイメージができた。
- ・行政の関わり方として、分かりやすいのは国際援助組織のジャパン・プラットフォーム。行政とNGO（非政府組織）とが同じ場で協議し、何をすべきかの共通認識を固めていく。そのようなものができれば、団体の代表だけではなく多様な市民の方々の参加が可能になり、意欲のある人が積極的に関わっていくことができるようになる。

【石塚委員長】

- ・選び方は難しいと思うが。

【杉崎委員】

- ・小田原市文化連盟は、個々の組織の連合体である。やる気のある人は実際にその中にいるのだが、そのような人をどのように引っ張り出すかということを考えなくてはならない。約 200 の団体を擁する文化連盟としてのやり方を考えないと、連盟自体が空中分解してしまうおそれがある。

【石塚委員長】

- ・この問題に関しては、私自身は詳しくないのだが、良い方法はないだろうか。

【諸星文化部長】

- ・市民ホール検討のプロセスとして市民検討委員会を開催しているが、ここでは特定の団体からは選出せず、手を上げた人全員に参加していただいている。検討委員の方々は、これからホール整備が具体化していく中で、ソフト面の議論や実際の運営にも何らかの関わりを持っていくことになるだろう。現在動いているのはホール整備に向けて検討する組織であるが、これが一つのモデルとなって、文化全般を議論するための集いの場ができていくことも考えられる。

【石塚委員長】

- ・希望した人は全員採用となるのか。

【諸星文化部長】

- ・そのとおり。しかし、市民ホールの市民検討委員会は施設の整備という具体的なテーマがあるので、人が集まりやすく議論もしやすいが、これが多岐にわたる文化全体となったときに、どれだけの人が積極的に手を上げ、具体的に関わっていただけるかは分からない。

【杉崎委員】

- ・市がこれまでに「文化連盟から何人」という選び方をしてきたので、団体の代表者に任せれば良いという意識ができてしまっている。市民検討委員会には約 50 人が参加しているが、文化連盟の関係者は少ないように感じた。文化連盟の関係者が後々になってそのような場があることを知らなかったということがないよう、きちんと考えていく必要がある。

【石塚委員長】

- ・終了時刻を過ぎてしまっているなので、推進体制については次回さらに議論したい。事務局としての案も考えておいてほしい。

(今後のスケジュールについて杉本文化政策係長より説明)

【石塚委員長】

- ・以上をもって第 4 回会議を終了する。